保育理解のための動画コンテンツの分析

Analysis of video content for understanding childcare

開　　仁　志（人間科学部こども学科教授）
Hitoshi HIRAKI (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

保育所，幼稚園，認定こども園で保育理解のために行われている園内研修には「伝達型」と「協働型」があるとされており，それぞれ特徴がある。また，保育理解のために子どもの姿や保育実践を可視化して共有する取り組みが進んでいる。その可視化の一つとして動画視聴を通して，子どもや保育を理解する方法が試みられている。研修で使用する動画としては，自園の子どもの姿や保育を撮影したものと，映像会社が作成したものの2種類がある。自園で撮影した動画は実際に関わっている子どもの姿をもとに話すためリアリティがあるが，撮影及び編集に時間がかかるデメリットが生じる。また，保育者が自身の保育実践を撮影されることに抵抗感を感じることも指摘されている。以上を踏まえ，本研究では，映像会社が作成した動画コンテンツの分析を試みた。その結果，「伝達型」園内研修に適した動画コンテンツと「協働型」園内研修に適した動画コンテンツに分類されることが明らかになった。

〈キーワード〉
保育理解，動画コンテンツ，研修

1　目的

保育所，幼稚園，認定こども園では，保育理解のために様々な園内研修が行われている。では，園内研修にはどのような種類がありどのような特徴があるだろう。

中坪（2018）は，園内研修には2種類あるとしてその特徴を以下のように述べている[1]。すなわち「伝達型」と「協働型」である。「伝達型」は園長，主任，経験年数の多い一部の保育者などが中心となり他の保育者に一方的に知識・技術・情報などを伝える上意下達（トップダウン）モデルの研修である。「協働型」は経験年数，常勤・非常勤，管理職・非管理職を問わず，相互に対話する研修であり下意上達（ボトムアップ）モデルである。「伝達型」は，園長などの管理職が示した方向に従って意思疎通を図る重要な機会となり，「協働型」は同僚と連携し，支え合うことが可能になるなど，園という組織がチームワークを形成するための機会となる。

また，保育理解のために子どもの姿や保育実践を可視化して共有する取り組みが進んでいる。可視化の一つとして動画視聴を通して，子どもや保育を理解する方法が試みられている。

厚生労働省がまとめた「保育所における自己評価ガイドライン（2020年改訂版）」（以下「ガイドライン」）では，保育の記録と活用について，言葉や文章に加え，写真や動画，図など視覚的な情報を盛り込んだ記録を挙げ，後で振り返る場合や他の職員・保護者と共有する際に，その時の実際の様子をより具体的に描きやすくなること，環境面に焦点をあてて振り返ったり同じ時間に様々な場所で展開されている遊びや子どもの動きが交わる様子を俯瞰的に捉えたりする場合などに役立つと述べている。一方，留意事項としては子どもの姿やその背景，保育の意図や展開といった「記録として残し，伝えたいこと」と適切に対応しているものを選び出すことが必要として，どのような観点・理由で記録に残すものとして選んだのか付記しておくことを提案している。また，職員間の対話が生まれる環境づくりの重要性として，意見を引き出しやすい状態をつくり，対話が活性化するように工夫することを挙げ，話し合いが散漫にならないように，あらかじめテーマや観点を明確にしておくことの大切さを述べている[2]。

中でも，保育理解に動画を活用する意義や効果について冨田（2007）は，保育者がビデオを使い，自己の援助スキ

ルについて自己評価し，援助スキルの向上を促す方法として，ビデオ自己評価法を提唱し，その効果について，援助スキルの頻度が上昇する一方，個人差も大きく研修方法であるビデオ撮影，自己のビデオ録画の視聴といった研修そのものへの抵抗感が関与していることも考えられるとしている[3]。

また，岸井（2013）は，ビデオカンファレンスを提唱し，ビデオ記録の特徴として，圧倒的に多い情報量，撮影者の意図を超える情報，再生方法を“変化”させて見直すことができる情報，文字記録のような「語り口」に左右されない情報，身体，時間，テンポなどを捉えられる情報，その場にいなかった保育者と臨場感をもって共有できる情報としている。しかし，一方で，ビデオカンファレンスはもう過去になっている（終わってしまった）自分の保育行為を検討することになり，当事者である保育者に完璧ではない自分の保育を見せつける「つらさ」を伴い，それから逃げずによりよい保育者を目指すことが必要としている。また，そのためには「映像による振り返り」で仲間同士の厳しいけれど温かな気持ちが不可欠としている[4]。

さらに，岸井（2013）は，ビデオカンファレンスに使用するビデオについて，市販のビデオ，担任保育者が撮ったもの，園内の保育者が撮ったもの，研修会の講師など外部の者が撮ったものなど様々あり特徴と限界があるとしている。市販のビデオは映像・音声が鮮明であり編集により決まった時間に収められ伝えたいことが明確なことが利点だが，音楽やナレーションが入っていると影響を受けるとする。ここで，岸井は，市販のビデオの具体例を挙げ授業で取り上げた際のポイントを述べているが，園内研修で使用するポイントは少し触れた程度である。一方，自分たちの保育を撮影したビデオは映像・音声の不鮮明さがあるが機器のデジタル化により解消されてきており，編集せずそのままの姿が見られ，外部の人間が撮影すれば日頃の保育への影響が少ないとする。ビデオカンファレンスの場に担任や撮影された園の保育者が加わると映像以外の資料を得られるが遠慮が生まれるマイナスがあるとしている[5]。

全国私立保育園連盟保育・子育て総合研究機構研究機構研究企画委員会（2011）は，保育の質を高めるための取り組みの具体的提案として7つの提案を行っており，その一つにビデオ映像を活用した研修を挙げている。ビデオ映像を活用した研修における質を高めるポイントとして，以下4点にまとめている。「①同じ場面をみんなで観て語り合えるので，その子どものことを知らない人でも参加しやすく，意見もいいやすい。そのため議論が活発になりやすいようです。②活字による事例は提案者の視点で切り取られているので，提案者の見方の範疇で理解することが多くなりがちです。しかし，ビデオによる記録は，たとえわずかな時間であっても，見落としてしまうような子どもの言葉，表情，身体の動き，周囲の子どもとの関係，場の雰囲気などを映しており，意外な発見が多いため，成果が得られやすいようです。③自分の知らない子どものビデオでも，その議論に参加することで，自分のクラスの子どもを理解することにつながり，参加者全員の学びにつながります。④参加者の多様な見方が出されることにより，自分の子どもを理解する見方を広げていくことにつながる実感が持ちやすいようです。」[6]

一方，留意点も3点まとめている。「①提供されるビデオは，あくまでも切り取られたある場面の1つの事実にすぎません。それなのに，その場面があたかも動かぬ証拠としての「真実」であるかのように用いられ，ビデオを撮影されたクラスの保育者の思いが傷つけられることがあります。撮影されたクラスの保育者の思いへの配慮が不可欠です。②職員の中から，「うちのクラスの○○ちゃんのことが気になるので，ぜひ，みんなで見てほしい」などの声があがってくるようなところからはじめるようにしましょう。場面を提供してくれる保育者が安心でき，やってよかったと思えるような進め方が必要です。③慣れないうちは，保育者のかかわり方を議論するのはやめたほうがよいかもしれません。ビデオを見て保育者のかかわりを批判するのは簡単ですが，実際の場面で簡単にできるものではありません。また，ビデオに撮られることがトラウマになる場合も少なくありません。そのため，基本は子どもの姿を撮影し，子どもの姿から行為の意味を読み取ることを活用の原則にすることが大切です。」[7]

先行研究からの知見を筆者なりにまとめると以下のようになる。保育所，幼稚園，認定こども園で保育理解のために行われている園内研修には「伝達型」と「協働型」があり，それぞれ特徴がある。また，園内研修のために子どもの姿や保育実践を可視化する方法の一つとして動画視聴を通して，子どもや保育を理解する方法が試みられている。研修で使用する動画としては，自園の子どもの姿や保育を実際に撮影したものと，映像会社が作成したものの2種類がある。自園で撮影した動画は実際に関わっている子どもの姿をもとに話すためリアリティがあるが，撮影及び編集に時間がかかるデメリットが生じる。また，保育者が自身の保育実践を撮影されることに抵抗感を感じることも指摘されている。

以上を踏まえ，本研究では，映像会社が作成した動画コンテンツを分析し，「伝達型」園内研修と「協働型」園内研修の特徴を踏まえ活用に適したものに分類することを目的とする。

2　方法

2－1　対象

入手のしやすさ（2021年12月現在でカタログ販売されていること），ネット環境の有無にとらわれず活用可能なこと（インターネット配信に加えDVDとして 販売されていること）を考慮し，以下の業者が扱う動画を対象とする。

「株式会社新宿スタジオDVD映像教材令和3年度vol.6総合カタログ」に記載されている動画コンテンツのうち，保育分野に分類される動画コンテンツ119点

・新刊・おすすめ5点
・保育の内容52点
・こどもの発達15点
・保育理論5点
・児童福祉7点
・特別支援教育31点
・こどもの保健4点

※同じテーマで複数の巻がセットになっているものは，まとめて1点としている。

2－2　分析手法

「株式会社新宿スタジオDVD映像教材令和3年度vol.6総合カタログ」に記載してある保育分野に分類される動画コンテンツ119点の概要を分析し，「伝達型」園内研修に適していると考えられる動画コンテンツ（以下「伝達型」動画コンテンツ）と，「協働型」園内研修に適していると考えられる動画コンテンツ（以下「協働型」動画コンテンツ）に分類する。

分類の判断基準は，中坪（2018）[8]が指摘した「伝達型」園内研修と「協働型」園内研修の特徴をもとに，「伝達型」動画コンテンツは，「知識・技術・情報などの伝達」を主にするものとする。「協働型」動画コンテンツは，「相互に対話」が生まれるようなエピソードの紹介が主であるものとする。

さらに，「協働型」動画コンテンツの中から，2017年以降に制作された動画コンテンツでありエピソードの提供を目的としている動画を，実際に視聴し，動画のチャプターごとに解説や内容等をもとにして園内研修における学びのキーワードを挙げ，「伝達型」園内研修に適したものと「協働型」園内研修に適したものに分類する。

3　結果及び考察

3－1　「伝達型」動画コンテンツ

「伝達型」動画コンテンツに該当すると考えられる条件は，「知識･技術･情報などの伝達」を主にするものである。

保育分野に分類される動画コンテンツ119点のうち，該当するものは，以下のとおり105点（88％）となった。

・新刊・おすすめ5点中5点（100％）
・保育の内容52点中40点（77％）
・こどもの発達15点中15点（100％）
・保育理論5点5点（100％）
・児童福祉7点中7点（100％）
・特別支援教育31点中29件（94％）
・こどもの保健4点中4点（100％）

「伝達型」動画コンテンツは，「知識・技術・情報などの伝達」を主な目的としているため，解説音声やナレーションにON/OFF機能は持たないといった特徴がある（解説字幕やテロップにON/OFF機能がついているものはある）。さらに，動画コンテンツの概要の文章に「解説・説明する」「疑問に答える」「講義」「指導法，対応法，方法，コツ，試み，仕方，実践のポイント等を紹介」「正しく理解」「学ぶ」といったキーワードが見られる。

実際の子どもの姿やエピソードが取り入れられているものもあるが，ある一定の知識・技術を伝えるためのものは「伝達型」動画コンテンツへの分類がふさわしいと考える。語りを中心としているもの，小学校以降の子どもの姿が中心となっているもの，学生対象の授業や実習のための「教材」となることを目的としているものも同様に「伝達型」動画コンテンツとした。

3－2　「協働型」動画コンテンツ

「協働型」動画コンテンツに該当すると考えられる条件は，「相互に対話」が生まれるようなエピソードの紹介が主になるものである。

保育分野に分類される動画コンテンツ119点のうち，該当するものは，以下のとおり14点（12％）となった。

・新刊・おすすめ5点中0点（0％）
・保育の内容52点中12点（23％）
・こどもの発達15点中0点（0％）
・保育理論5点0点（0％）
・児童福祉7点中0点（0％）
・特別支援教育31点中2件（6％）
・こどもの保健4点中0点（0％）

「協働型」動画コンテンツは，「相互に対話」が生まれるようなエピソードの紹介を主な目的としているため，動画コンテンツの概要の文章に「エピソード」「取り組みの紹介」，「姿が現れる」「見る」「見つける」「感じる」「考える」「話し合う」「語り合う」「思いめぐらす」「深める」といったキーワードが見られる。

ある一定の知識・技術・情報を一方的に伝えるためではなく，実際の子どもの姿やエピソード，保育の取り組みを，主体的に見る（見合う）ことで，視聴者自身が見つけ，

考えること，話し合い深めていくことが目的となっていると考えられる。

そのために，解説音声やナレーションにON/OFF機能がついている特徴がある（2017年販売以降のものに限られる）。このことは，岸井（2013）[9]が指摘する音楽やナレーションが入っていると影響を受けることへの配慮と考えられる。

3−2−1　動画コンテンツにおける内容分析

中坪（2018）は，「協働型」園内研修はオープンエンド（終わりが決まっていないこと）な対話を目的としており，成立するためとして7つの習慣を挙げている。その中に，「多様な意見を認め合おう」（第1の習慣），「個別・具体的な事例をもとに語り合おう」（第3の習慣）がある。これは，参加する保育者が似たような意見を出すのではなく多様な意見を出し合うこと，さらに，意見を出す際に参加者が抱く子どもの姿が異なり意見が拡散したり話が脱線したりすることを防ぐため個別・具体的な事例をもとに語り合い論点を明確にすることと説明している[10]。

そのことを踏まえ「協働型」動画コンテンツとしては，①エピソードが個別・具体的であり明確であること，②一つのエピソードについて様々な見方・考え方ができ多様な意見が出ることの2点が必要と考える。

3-2で挙げた「協働型」動画コンテンツは概要からしか判断していないため，実際に条件を満たすエピソードが得られるか否かを視聴してチャプターごとに分析する。

現在（2021年）施行されているのは2017年告示の保育所保育指針・幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園教育・保育要領のため，2017年以降に制作された動画コンテンツでありエピソードの提供を目的としているものに視聴対象を絞った。その結果，実際に視聴して内容を分析する対象となる動画コンテンツは，以下の2点となった。

※「株式会社新宿スタジオDVD映像教材令和3年度vol.6総合カタログ」より

<動画コンテンツ①>

監修・副音声解説：東洋英和女学院大学人間科学部保育子ども学科講師佐藤浩代，認定こども園捜真幼稚園園長寺田千栄，撮影協力：学校法人捜真バプテスト学園認定こども園捜真幼稚園「教育・保育のエピソードシリーズ　生活・遊びを通して学ぶ保育　満1歳以上満3歳未満の園児の保育内容」DVD全3巻　各巻60分　2018年5月制作　監修者による解説音声ON・OFF可

第1巻　1歳児編「1歳児クラスの1年間の生活と遊び」

第2巻　2歳児編　前編「2歳児クラスの1日」

第3巻　2歳児編　後編「日常の遊びの場面から」

神奈川県横浜市の「認定こども園　捜真幼稚園」での1歳児クラス，2歳児クラスの生活・遊びの様々なエピソードを紹介します。長期間の取材により，子どもたちの成長の姿をみることができます。また，園の先生が撮影した貴重な場面も含まれています。これらの場面から，1歳児と2歳児が，生活・遊びを通してどのようなことを考え，学んでいるのか，みていきましょう。そして，幼保連携型認定こども園教育・保育要領と保育所保育指針で示されている満1歳以上満3歳未満の園児の保育の内容への理解を深めていきましょう。

<動画コンテンツ②>

監修・副音声解説：四季の森幼稚園園長/玉川大学教育学部教授若月芳浩，撮影協力：学校法人育愛学園四季の森幼稚園「教育・保育のエピソードシリーズ　主体的学び・対話的学び・深い学びへのアプローチ」DVD全4巻　第1巻48分，第2巻41分，第3巻51分，第4巻50分　2017年5月制作　監修者による解説音声ON・OFF可

第1巻　3歳児編「遊びの中から芽生える学び」

第2巻　4歳児編「人・モノ・コトとの関わり」

第3巻　5歳児編「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」前編

第4巻　5歳児編「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」後編

この作品では，神奈川県横浜市の「四季の森幼稚園」での教育・保育，主に自由遊びの時間における様々なエピソードを紹介します。園の先生が撮影した貴重な場面も含まれています。撮影時に園に来ていた実習生との関わりも見ることができます。これらの場面から，今回のテーマ，幼稚園教育要領などで示されている，「主体的・対話的で深い学び」について考えていきましょう。

「①エピソードが個別・具体的であり明確であること」については，テーマを説明するために一般的な子どもの姿（発達，興味・関心，関係性等）や保育実践の流れや方法を紹介したもの（エピソードがテーマ理解のための手段）ではなく，その園・その子（その子たち）ならではの固有性をもつエピソードの内容であり，エピソード自体から視聴者が読み取り学びを深めることを目的としたものに○（該当しないものは×）を付した。「②一つのエピソードについて様々な見方・考え方ができ多様な意見が出ること」については，共通理解のため似たような意見を求め一つの正解を導き出すことを目的とするものではなく，様々な読み取りができるもの，多様な見方・考え方の大切さを学ぶもの，子ども理解，保育理解の広さ・深さを理解することを目的としたものに○（該当しないものは×）を付した。エピソードのキーワードも挙げた。

表1　「協働型」動画コンテンツのチャプター分析

動画コンテンツ	チャプター（※副題を除く）※テーマ説明，全編再生を除く	個別具体的明確	様々な見方考え方多様な意見	エピソードのキーワード
動画①第1巻	登園	×	×	登園時のポイント説明
	室内での遊び	○	○	葛藤，気持ちのくみ取り等
	屋外での遊び	○	○	葛藤，気持ちのくみ取り等
	午睡/降園	×	×	午睡/降園のポイント説明
	食事の様子	×	○	食べない抵抗表現受け止め
	はじめてのお散歩	×	○	はじめて，偶発の生かし方，約束，安全
	ダンス遊び	×	×	日常と行事のつながり
	お誕生日会ごっこ	×	×	共通体験とイメージの共有
	ボール転がし	×	×	偶然体験と興味，援助のタイミング
	礼拝ごっこ	×	×	日常と遊びのつながり
	帽子をかぶせてあげる	○	×	異年齢での育ちの説明
	お散歩	×	○	発見，気付きの生かし方
動画①第2巻	登園～自由遊び	×	×	登園時，自由遊び，片付けのポイント，発達
	朝の礼拝	×	○	礼拝ポイント，座らない子への働きかけ
	おやつ	×	×	おやつのポイント
	お散歩	×	○	お散歩のポイント，経験
	昼食	×	×	食育，マナー
	午睡（午睡明けのお着替え）	×	×	午睡，着替えのポイント
	自由遊び・おやつ・降園	×	○	遊びを生み出す環境，見立て
動画①第3巻	おもちゃを貸してあげる	○	○	物の取り合い，遊びの保障か貸し借りか
	どこでしょう	×	×	手遊び，やりとり
	駐車場ごっこ	○	×	ごっこ遊び，興味
	いいよ。だめよ。	○	○	子どもの気持ちの読み取り，やりとり
	お医者さんごっこ	×	×	見立て，つもり，イメージ
	おままごと（ごはん）	×	×	見立て，つもり，イメージ
	積み木遊び	×	×	積むと壊す魅力
	声が響くよ	○	×	反響する発見
	かわって。さわって。	×	×	言い違い，聞き違い
	電車がひっかかった	○	○	試行錯誤，助け合いの保障
	虫に親しむ	○	○	擬人化，一人一人の虫との関わり方の違い
	屋外のままごと（けんか）	○	○	一人一人の思い，友達との関わり
	高い所に登る	○	○	没頭，友達との関わり，保育者が見守る，出る見極め
	室内のごっこ遊び	○	○	それぞれの思い，イメージの違い
動画②第1巻	おおかみだかくれろ	○	○	それぞれのイメージ，友達とのイメージの共有
	積み木比べ	○	○	数量の比較，友達の存在
	お医者さんごっこ	○	○	一人一人のイメージ，思いの違い
	ころがれ太鼓	○	○	物のもつ特性と使い方
	みんなで片付け	○	○	遊びと片付け，みんな，投げかけ方
	よーいどん	○	○	遊びと行事のつながり，参加の仕方，ルール
	たべてたべて	○	×	動物の世話
	かまきりがたべた	○	○	弱肉強食

動画②第2巻	つくってあげるね	○	○	見本，モデル，やってあげる・もらう
	小さな種	×	×	自然との関わり
	ひかりのいたずら	×	×	偶然・発見の生かし方
	先生かいて	×	×	必要感と文字
	先生読んで	×	×	1対1の絵本の読み聞かせ
	お月見だんご作り	×	×	実感を伴った数量の感覚
	伝え合い	×	×	図形の感覚
	うこっけいの死	×	○	飼育動物の死
動画②第3巻	モルモットとの対話	×	×	飼育動物との触れ合い
	セミのぬけがら取り	○	○	試行錯誤，協力
	虫の話	○	×	経験の伝え合い
	虫探し対決	○	○	一人一人の思い，チームの関係性
	草できずぐすりをつくる	×	×	見立て，つもり
	ピアノ	×	×	教える姿
	ハト時計	×	×	共通体験
	積み木（カプラ）でタワー作り	×	×	継続，夢中，協力
	創作絵本	×	×	想像と表現
	敬老の日のお手紙を書く	×	×	発達と必要感と文字
動画②第4巻	マット遊び	○	○	運動と安全，一人一人の思い
	ブランコをめぐるいさかい	○	○	順番，ルール，伝え合い
	どろけい	○	○	ルール，異年齢，一斉と自由遊び
	鉄棒	×	×	遊びの中での運動
	木工遊び	○	×	日常での制作
	ビー玉転がし	×	×	繰り返し，学び
	けんかと仲直り	○	○	見守り，介入，共感，子ども同士の解決
	縦割りのリレー，中あて	○	○	異年齢，遊びの変化，展開
	ステージごっこ	○	○	イメージ，相手意識，表現

3−2−2　考察

分析した「協働型」動画コンテンツのチャプターは68である（表1参照）。分析から，「協働型」動画コンテンツの2つの視点両方に当てはまるチャプターは，25（37%）となった。また，①のみ当てはまるチャプターは6（9%），②のみ当てはまるチャプターは7（10%）であった。両方当てはまらなかったチャプターは30（44%）となった。

このうち，「協働型」園内研修に活用できるチャプターは，①②どちらも当てはまるチャプターと②のみ当てはまるチャプターと考える。①のみ当てはまるチャプター，①②どちらも当てはまらないチャプターは，「伝達型」園内研修への活用が望ましいと考える。その理由は，エピソードのチャプターをもとにして多様な意見が出され対話が生まれることが協働型園内研修の核となると考えるからである。

この結果から，エピソードの提供を目的とした「協働型」動画コンテンツであっても実際に「協働型」園内研修に活用できるようなチャプターの数は少なく，厳選する必要があることが明らかとなったと考える。

①②どちらも当てはまるチャプターは，全て遊びの場面を扱っていた。その理由は，遊びの場面は，一人一人の子どもの思いが表れ，保育者や友達と心を通わせ言葉を交わし力を合わせ，時には困難を抱えぶつかり挫折や葛藤を味わう等，多種多様な姿が見られることから，様々な見方考え方をすることができ，多様な意見が出やすいからと考える。

しかし，遊びの場面を扱っているチャプターでも，保育所保育指針・幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園教育・保育要領が目指していることをどう保育実践に生かすかを説明したり，園で大切にしている理念や方法を説明したり，活動の内容を説明したりすることが主な目的であると，説明されたことを理解したか否かを問われることが中心になり，多様な意見はあまり出ないと考えられる。

一方，生活の場面でも②に当てはまるものがあった。それは，一見決まりを守っていないように見える姿をどう捉えるか，保育者によって様々な見方考え方があると考えられ多様な意見が出る可能性があるものである。その子なりの思いをどう読み取り援助するのか，保育者間で価値観の違いが表れることから対話の必要性が生まれる。

また，解説があることによって，エピソードの背景や状況が明確になり理解しやすくなる。反面，岸井（2013）[11]が指摘するように，視聴者はナレーション等に影響され，解説が正解のように感じ多様な意見が出しにくくなる傾向があると考えられる。その理由は，解説者のほうがエピソードに関する情報を視聴者より多く持っているためである。さらに，解説者は子どもの発達や保育の専門家や動画

コンテンツが撮影された園の園長が多いことも，異なる意見を出しにくくする一因となることが予想される。

「協働型」園内研修に活用するために必要と考えられる視点である「①エピソードが個別・具体的であり明確であること」「②一つのエピソードについて様々な見方・考え方ができ多様な意見が出ること」を踏まえ，園内研修の担当者は，事前に解説付きで動画コンテンツを視聴し初めて動画コンテンツを見る視聴者がエピソードを理解する時に必要な情報を得ておき，適宜自分の言葉で補足を入れつつ，解説無しで動画コンテンツを視聴するという方法が考えられる。そうすることで，短時間の園内研修でも動画コンテンツの内容を共通理解することができ，視聴者が主体的に動画に映し出される子どもの姿から読み取ろうとする姿勢が生まれると考える。

4　総合考察

本研究では，映像会社が作成した動画コンテンツを分析し，「伝達型」園内研修と「協働型」園内研修の特徴を踏まえた上で，双方の使用に適した「伝達型」動画コンテンツと「協働型」動画コンテンツに分類することを目的としていた。

その結果，映像会社が作成した動画コンテンツは，「伝達型」動画コンテンツに適したものがほとんどであり「協働型」動画コンテンツに適したものは少数であることが分かった。

このことから，映像会社が作成した動画コンテンツは「伝達型」園内研修に活用されることを目的としたものが多いと言えよう。伝えたいねらいをもとにして企画がなされ，伝えたい内容に添って撮影・編集をし，そのねらい・内容を学びたいという保育現場が購入して園内研修に活用するという映像会社が作成した動画コンテンツの特徴が結果に表れたと考える。

一方，「協働型」園内研修に活用できる映像会社が作成した動画コンテンツは少数であり，チャプターによっては「協働型」園内研修の目的である対話の広がりや深まりにつながらないようなものもあった。そのため，どのような対話が生まれて欲しいかを明確にして，適した動画コンテンツのチャプターを厳選した上で，園内研修に活用することが望ましいことが分かった。

映像会社が作成した動画コンテンツを使用する理由として筆者が考えるのは，①研修用に作成されており撮影・編集の負担が無いこと，②園内研修の場に動画に出演する保育者がいないため話し合いへの抵抗感や遠慮が無いこと，③テーマや観点が絞られていること，④他園の保育を視聴することで自園の保育実践を見るだけでは出てこない多様な視点や知識を得ることができること，⑤個人情報保護の観点，⑥広く研修に活用することが許可されていることの6点である。

今後，保育現場で「伝達型」園内研修か「協働型」園内研修のどちらに適しているかを踏まえ，園内研修に映像会社が作成した動画コンテンツが活用されることを期待したい。

本研究の課題としては，実際に視聴できた映像会社が作成した動画コンテンツが2点に留まった点である。2017年以前の動画の中で「協働型」園内研修に適したものがある可能性を鑑み，広く分析を試みたい。また，映像会社が作成した動画コンテンツをもとにした園内研修の在り方についても検討を進めていきたいと考える。

引用・参考文献

(1) 中坪史典（2018）保育を語り合う「協働型」園内研修のすすめ―組織の活性化と専門性の向上に向けて―．中央法規出版株式会社．3-4．

(2) 厚生労働省（2020）保育所における自己評価ガイドライン（2020年改訂版）．26-32．https：//www.mhlw.go.jp/content/000609915.pdf（情報取得2021/12/23）

(3) 冨田久枝（2007）保育者のためのビデオ自己評価法―理論・方法・実践的効果―（株）北大路書房．228-230．

(4) 岸井慶子（2013）見えてくる子どもの世界―ビデオ記録を通して保育の魅力を探る―．ミネルヴァ書房．25-33．

(5) 同上．154-157．

(6) 公益社団法人全国私立保育園連盟保育・子育て総合研究機構研究企画委員会編，大豆生田啓友・三谷大紀・髙嶋景子著（2011）保育・子育て総合研究機構報告書「保育の質を高めるための体制と研修に関する研究」報告書保育の質を高めるための取り組みの具体的提案．公益社団法人全国私立保育園連盟．12-13．

(7) 同上．

(8) 前掲(1)．

(9) 前掲(4)．156．

(10) 前掲(1)．21-33．

(11) 前掲(4)．156．